



門へ利ふ
除籍
2/21
2

85
6625
2止

瀨奈宗
圖書
圖書

圖書
圖書

才八言行論

世も能潜の言りとはおよぶおと力ふおこすおはら
儒師の大たり老在揚墨のたるといられ言りの
ゆゑととあれむはれ申すも凡雅のたるとは言連能の
おありて當時よりと連言も人のまのこゝろに
うに中子以上の人とておは月雲の籍とていふかた
花鳥の色にもよるはて町人百姓の所買走のりて
二番目の言りをしていふ妻前の方と呼あけと連言せられ
とやうにやや草摺の言りよしてとあれかよもあ

一論

起稿と合せしむる耻の二字は例の教坊として律を
他借の論語あるはんやられしと他借の異典の言
ふてはしむるはむしてあるはれんは我々の
まよひしよとほらむしむるはむしむるは
あつん

才九変化論

亦も他借の变化とせしむるは今日の内なる一して万物
の不定とほらむしむるはむしむるはむしむるは
雨ふらむしむるはむしむるはむしむるはむしむるは
ちねぶさちねぶさをく箇の事ありして是とありて

ほとあつんはむしむるはむしむるはむしむるはむしむるは
のむしむるはむしむるはむしむるはむしむるはむしむるは
天地のはむしむるはむしむるはむしむるはむしむるは
他借の变化とほらむしむるはむしむるはむしむるは
とらむしむるはむしむるはむしむるはむしむるはむしむるは
の始中換のことありて是の事ありて是の事ありて是の事ありて
例の借として雅ありて今日の他借と始換の二口傳を
りて中に風雅の情とありしむるはむしむるはむしむるは
全く附合の法ありて是の事ありて是の事ありて是の事ありて
はれし附合の法ありて是の事ありて是の事ありて是の事ありて

一らの趣向とありてこれとある句の語のよきも句のよきも
紙とるやけちなるに吾もなま。趣向とけしんはしとて
七五箇の一條とあるのしはて一らの趣向といふ句
の作あるともしもあつたてし句の「使」を「尋」して
我句とたてし附あつたてし「尋」も「使」の語も
二句の箇よとてゆるといふやとて「使」を「尋」して
て上よあやると下らゆるとえ下れきとて上よあやると
われの和身の上と下とて「尋」の作とて「使」の作と
今とてふ句の語とて「尋」の作とて「使」の作と
そのよとて「尋」の作とて「使」の作と

さかた附合のほもよきとて「使」の一分の趣向といふ
の語とて「尋」の語とて「使」の語とて「尋」の語と
人倫のちよとて「使」の語とて「尋」の語とて「使」の語と
ありて「使」の語とて「尋」の語とて「使」の語と
衣裳の模様も「使」の語とて「尋」の語とて「使」の語と
「使」の語とて「尋」の語とて「使」の語とて「尋」の語と
とらとて「使」の語とて「尋」の語とて「使」の語と
使とも「使」の語とて「尋」の語とて「使」の語と
百韻とある句とて「使」の語とて「尋」の語と
能く「使」の語とて「尋」の語とて「使」の語と

さるる例の字とひとも難とにけり素敵の附を
或は此語のこあらもつらふはねの附方^{コナタ}
より彼^{コナタ}附とそとを僧とて大なるむくけを
向附とらあせられし商人もを僧とおあ大なるおほ
あつおのち大なると動とてあつおの詞と下のおほ
こら入あつおの詞とお向とほあてはつら有るの信と
つなぬるとそ人の信はほすつらも附やのあつおに
赤懸のちまのむつらなれおとめ大なるとあつて信と
と信はねのむつらとそつらおあつおとおむつら
向附の信と足つらお向とあつて信とあつて大なる

あつおの用あつて附はかた毫末の差あつて言に信語
あつて信と信とつらあつてお向より信と起つてあつ
連れたの人の妻代とつらと結れお向とお向もあつたり
て人のあつおのちあつて伸れつら向も又向もあつたり
凡景がらあんにあつて村通の足れつらあつて田中の松の
あつちつらと附さんあつてお向の信と動つてお向と
狐と化されつらあつて附つらあつてあつおのあつちつらと
あつて詞のあやとつらあつてあつてあつてあつてあつて
いふと起情とつらあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつて起情を伸る時の用とあつてあつてあつてあつてあつて

とありて御音といひ走りといひ鼓音と云ふことあり申比
東華式は八那の附合あり今うと十論の回ふとありて
附合のちと十五あれども附合をきくにはよりて七名
八那も之法の中此細目とある論一況や百韻の百表
あはれりて附合もそれと付にうへりしとされ連歌
も此語も佳名と各句一傳あはれと。各句の太極
の一氣よりて一應よりおらりて堂よりとわれいなり
る理もあく理もあくまゝて法もあく式も
畢竟を信の二よりりも場を名人と初ん^{あり}と
てよひのいひばもを論とるに及り此はもく此語

の上まといふら神宿ありて枕をかへむげり
ぬ遊山歌水よ人とくのおおよも一應のいひと
ふよされども神方のるわうと他人の理をたは
他人のるわうと神方の理をたはらて論語に
何人とありて一語ありとくをさるる口申の法とや
えよりて又偏の法とありき第一にまよふ身歌の
名とありて風流とありて風流とありて一平のいひ
ふよされきんたれと此語修りの人とありて
ま席よのちむけと衣食に一日の操舞とあり
てまを奉山のまおさるるをいひてはれぬ風流の

附合の之法とむじうるもなりし又新十辨の御注
よりかゝる例に於て分るのふらり辨念の趣向よ
きうふらり好まらるるの仕合にてあつて母
の不運あらんそと虚実の虚実とむじく十論の
虚実と云ふの變化ありはれども一たの調子あれ
殻ヤコと云ふやくと云ふあつては法と云ふ
人の右指を旋と云ふはの義と云うて敵と敵
と此はむらあ付を氷の刃ヤイと云ふはあつて高甲
ぬらりよ切割キリうらと云ふはまにけと云ふと云ふぬら
孫と文武の好あつては十論と云ふは勝カチと云ふ

とあんなかへもして我らの字者達たる即の理オチ
世法の附合うて虚実の變化のり世法のオチ
あれは御注と云ふのちよあつては御注の
におとらうと云ふは

傳曰世段と云ふは世漏うて人天の事に哀れ
と云ふはらひらり儒師の教ある言ふは世法の
機嫌と云ふはと云ふと御注よ古今をこころ
百韻の變化のらめちるは法や各のちあつて
きとく師の孫よ一念の變化と云ふは
九十刹那と云ふは一念のちあつて

と云ふ一語の言に文章の公道と稱、言に能造
の世法と信を成んや、はるるたる一能造の附と
ありの言、要ある才一より有る附といふ、才三
才と云ふも、才一といふ、即歸一のる、能
うてこれくも文章の論も、何くも例の能造
のありといひむ、成る能造の古今と論、て之新
の論を、めあるも、能造の二、不、會、底、の、も
ある言、に古今の言、と、呼、と、

「始」
又、或、ゆ、
古、池、や

「中」
能、造、

「終」
能、造、

「終」
能、造、

能、造、

られ、能、造、を、あ、ぬ、あ、く、昔、の、能、造、の、は、と、を、は、く
と、ら、け、や、よ、く、の、中、へ、は、か、り、か、た、ま、し、つ、つ、こ
の、中、と、ら、け、や、よ、く、の、能、造、の、は、と、を、は、く、中、に
は、り、一、さ、か、と、ぬ、く、も、を、れ、と、は、く、その、餘、情、も
文、章、の、優、劣、も、も、ち、あ、り、一、今、や、其、二、と
其、一、と、と、評、を、儒、師、を、と、と、を、は、く、一、
律、美、よ、と、一、つ、つ、と、教、誡、と、い、は、れ、一、其、中、の
一、と、あ、り、一、て、画、去、よ、あ、り、一、と、風、雅、と、い、は、れ、一、
風、雅、と、教、誡、の、論、と、張、子、の、言、を、書、室、銘、よ、あ、り、一、
後、愚、と、訂、頑、の、所、見、ら、る、と、難、一、東、西、の、二、名、の

文ありとも難くしゆくを考へていふ業は子
 といふときもいふて風雅のよきとあつたあめりか
 勸字文ともいひ座右銘ともいふかといふ馬
 の文章訓よけ論あり言ふ人のまじりよき
 あれい始後のこと師次員に傳とていふは
 の名の中に拍子と色まの神文と海ま

追ふ子

お用八

きりぬ田の^{ヤイト}名者といふ

世向と檀林の名よりいふて例よ言傳の拍子
 傳とて考のあつていふ今この世傳の考あつて

といふは神のまゝとていふ拍子とていふ其考
 とていふといふ

および^{the name of}いふていふ
 および^{the name of}いふていふ

世向と頼政のおねまゝといふ今く能國の
 といふあつて彼を陸奥といふ里の情と
 白河といふ色の考とあつていふ遠近の用不用
 ありて世向のいふ名のあつていふ今も
 白河ありといふていふ考とあつていふ
 といふていふといふ考とあつていふ

十編
十回
才一の終句より始句の連字の格も、
去るにその去るを去るに、何やら
なれらるゝ同意と、等教ともいふ
類説にけり、論ありき、なれらるゝ
此格も、色のいふを、
あきらみ盡す、いふの文法を、
いひ、
殊よふの二名と、
双関の法も、
と、

い才一の終句より始句の連字の格も、
編一なるなりと、
十編の信偽と、
といふて、
の意と、
一子より、
中木の用、
の法も、
ぬ一、
よら、

久の老身も新しく世居よつたは又母も若く
新古を今日日の変化して作者の傷もさ
せたるも能借のふ業と其家の刀法よれた
さる世の思答う一やれと傳ふるも我家の
ふ段と覚束あまふあしむ言に氷刃の二句
とて世十論と看破さるる世の理を
世情の和とあつひ虚言の二論を人ふ世変
とらふて能借をさくまの遊あれと
淫弊の二子不説らるる世論をさるる賊
のころあつひ

才十法式論

此も能借の法式と連するの家にあつひくは
遠波のさう合も押本身歎の志きつひも一
句の抱と二句とあつひ七句ちり抱と又句と
又句ちり抱と三句とあつひ二句の式と二句と
よたぬきりの中ら。事と典の掟もるるおと
あつひとあつひ法とやまうんのとあつひ
一やれと吾能のたつひと十韻とつひ百韻と
一節の式と百韻とあつひ世はつひ能借の法式

三人を例の節のようなくく三人連立のよう
傾城猿糸の擧とありて能活とてせむか
まゝとむけぬ、真意やうと宗匠の法と判者の
法とと新式の二條よりうらく執事のはと一條と
ありまゝこの法あり連立のはあり又條の例のらね
ときと一、節の、宗匠のらありと中二に、我
人法とんとけり我句と人とを宗匠とく人宗匠
の法とんとく節の、調子と夫れ、まゝ、まゝ、
凡雅の運ちられ、その能活め好と好とむむ、
り、くぐの附句あるに才一と附心ゆる能うたあり

とす、りて附句の趣向と好とく、お句の、
才二とご句の、お、お、お、お、お、お、
の折の變化と、論の、お、お、お、お、お、
あり、お、お、お、お、お、お、お、お、
の、お、お、お、お、お、お、お、お、
は、お、お、お、お、お、お、お、お、
の、お、お、お、お、お、お、お、お、
と、お、お、お、お、お、お、お、お、
の、お、お、お、お、お、お、お、お、
月老のあり、お、お、お、お、お、お、
後、お、お、お、お、お、お、お、お、

ものまことにしるる世なるのみや。各句よすなれどもと
 ある物あり附句にすれ難とある物あり詞のしるる
 も物のまじりしもも場よしるる人よしるるもの
 中らりしうちちもらり新事のあけしるるとおちちよ
 時あり古式のあけしるるちとときとあけしるるちと
 おちちげのねしるるちとまにまにまに人も感と
 ち知とおちちも人も信ありしるるちとけりて先
 けりてしるるちとならちありあはしるるちと近
 ちとよらちしるるちに古人の詞ありあはしるる
 ちと感ありしるるちと信ありしるるちとちとちと

益とありしに妙と信の二子よめれし能はるる
 有性の師よしるるちと能はるるちとよらちと
 ちと人よしるるちと例の師よしるるちと
 古人の詞の中らりしちとあはしるるちと判者
 ちと近の二體よらちと親師よしるるちと
 ちと十二應の自在とちと世法とあはしるるちと
 ちとその勝方をちとちとちと射よしるるちと連
 ちと賭物とあはしるるちとあはしるるちと損
 ちとありしとちとちと判者よありちと況や
 ちと長点の法ありちと長点の格ありちと考
 ちと逸のちと

斯眩といひ祖録より子疑一決といふのこゝろを
 儒御の内訖より下意のこゝろを記ししは教化
 の人此大秘よりあらはれやむし此記述の記述は
 といふ判ありし世を例の物にこそしこゝろ連言
 の輝魚より記されしる眼もよとされしや
 我々の他記より他記のこゝろあはれと他記の
 詞といふおとあはれしる波の波といふこゝろの
 詞とあはれしる連言と他記の記をふあり他記
 我々の記述より雅言のこゝろの記述の記述とも
 保記の記述より他記の記述とも此の記述と

ちりりとして新式よなあの信訓ありまは雅言といひ
 保記といひとちりし他記の用ちりしやちりしや
 ととちりしやちりしやとちりし他記の記述とあはれし
 海や世の中の善言も悪言もあはれしやちりしや
 とれしや病の有せしやちりしや同の毒細と結せしや
 世よりし他記の記述より人の記述より十國十色ある
 他記の記述よりちりしやちりしやとちりしやちりしや
 人よりし世中の倫ありしやちりしや執るものちりしや
 ちりしやの撰書とちりしやちりしや連言の調子とまらしや
 復ると真ると此記述とあはれしや編書の

こゝる管やねもしくや能潜のこゝと味とさうしーとを
ある時よなるの戯あう論語の精^{シラケ}らひいしはち
えとりてさうと例のたひーこせられく厭うと
まのちさう文まの優うとあつたおてさうに雅俗の
はういとさうの子成る文質の論ともあつたはて新式の
郷良れよこ席と一汁二菜にさうと茶とたんと
かさうあるおうとめ笑はよ氣とほまうさうとの
結構よさうと一酒と二酔とさうとさうと
漢や茶人の時さうも能潜の供給とあつたさうと
おとさうと待とあよ席一待とさうとさうと時感睡

よおとさうとさうとさうとさうとのさうとさうと
郷應の軽うんもさうと一は候約のさうとさうと例の
杯とさうと例のたひーとまああるとさうとさうと
客者句とさうとさうと照とさうとさうとさうと
さうと客句とさうとさうとさうとさうとさうと
詞のさうとさうと一服とさうとさうとさうとさうと
あつたさうと客句の余れと調とさうとさうと服の初字
けははよさうと一せとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとあり世名能潜の儀式とさうと奉納追善
のさうとさうと客句の作者とさうと茶とさうとさうと

後とにそふとありていふにいふにいふにいふに
 して座しきまゝのふちと扱ふとて座の表に
 裏一羽とひき付しきまゝのついでとらゝむ
 此とに二羽と行あるとみやと座と奉句はね
 あつねと或と一たのえんう或と一家のなある
 一のの射ととえありやと女法の法に奉句と
 一かゝり座の再と女お合と一かゝり
 句の老より奉句はけり押はし二をよむ
 一の儀式をよむとやとたのなと法は
 一の儀式をよむとやとたのなと法は
 一の儀式をよむとやとたのなと法は

一の儀式をよむとやとたのなと法は
 一の儀式をよむとやとたのなと法は
 一の儀式をよむとやとたのなと法は
 一の儀式をよむとやとたのなと法は
 一の儀式をよむとやとたのなと法は
 一の儀式をよむとやとたのなと法は
 一の儀式をよむとやとたのなと法は
 一の儀式をよむとやとたのなと法は
 一の儀式をよむとやとたのなと法は
 一の儀式をよむとやとたのなと法は
 一の儀式をよむとやとたのなと法は

論語の字匠としてのついでに、すなわち、
「吾道遠近も世教を正す。五條ありしを今に
記さるるに及びしを今に記さるるに
世教の人知とす。あつて論語の温厲の身と
才二と諷笑の風俗とありて、
と志れや他借と。もりの陰晴はひくくよ
あつて、時の妻あつて、
他借のうらあつてもあつて、
法をたすも何のあつても、
論とさうさう、
ま話の中の風と推とさうさう

もたふも今日の戯として、
あつてもあつても、
もんとす、
とさうさう、
傳の世篇を全く我家のはあつて、
かりねら、
あつてもあつても、
何のあつても、
所謂とさうさう、
て五條のらねとさうさう

一社の説とてつゝも自らも場の機持おれり
いのおよそまきつくしてはたふは通す
青園とある所の神のまじり
わらう萩の 風はまじりきり
世向を青園の神折とて同秋の七向同ちるに青
園と月の階かゝるれ萩と神の威風と
らふまじりも次の神よむりきと例は遠く
青園とわらう月と合されり
月とつゝまきつくるとして
八月と旅ありらよ 十幅綿

これと一社の名譽ありとても此よちらば
我々の太極生とつれのを此青園とよ
おれり萩もあはまきとふ近のよ
つりけは一社の説をなすはくの條目を
おれり金と公私の二子に措きと
虚るまととつれんやまきおれり
詞と向馬と祖の常語ちりはるを
家訓もるの真加とつり運と
の須便あり能清とを例の
次は執事のふおとて假とて真との配と

に指月の喩と云ふ言はに仇濬の用と世用とを
あつん言や才之の條目に二たのれ節といふ
おに人の徳廣るく今と云私の二子と
て法の私曲といふ言はに十論の正道と
多に十論の法と云ふ言はにやこれと世の
五條同と云ふ言はにおに我々の文道と云は
二篇と云ふと云ふ言はに式の二篇と云ふ
先と云ふ言はに説く言はに人への言と云
け十論と稟息と通してけけに仇濬の言と
よつて云下は核設問設と云ふ言はに儒の

の言教と云ふ忠信の教い諸道の言わしてこれの
道と文行の言にあらがく言はる言はる言はる
と云ふ言はと云ふ言はる言はる言はる言はる
言はる言はる言はる言はる言はる言はる言はる
人の言はる言はる言はる言はる言はる言はる
言はる言はる言はる言はる言はる言はる言はる
才と云ふ言はと云ふ言はる言はる言はる言はる
言はる言はる言はる言はる言はる言はる言はる
と云ふ言は二と云ふ言はる言はる言はる言はる
仇濬の言は即と云ふ言は二に仇濬の言は言はる言はる

百首の一言とあり世とあり近くを奇書の
一代集も浮橋の詞とありてよ何川の
奇りありきる今や十論の語をて
言に論者の大功と伝と傳りよ木鐸の喩を
ちと例と能讀のおうこより仰宗の龍樹
と書と薩のたとやめく世の論師とあり

ちうへ



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '龍樹' (Ryūjū) and '木鐸' (Mokkoku).

